

三河アララギ

2023年 令和5年9月 長月
ながつき

九 月 号

第七十卷 第九号



ニューヨーク日記(203) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

MESSI COMES TO MIAMI
Blue Shoe Diaries



世界の大物はみんなマイアミに引っ越してきてる?今日はあのアルゼンチンサッカー選手のメッシが家の歩いていける近所に引っ越してきたよ!ベッカムが紹介するその「メッシようこそマイアミへ」のイベントに私も行ってきちゃいました。晴れでも雨でもやると言う中マイアミらしいもの凄い雷と嵐のような雨の中試合もやらないのにスタジアムは満席!すごいすごい活気でした!楽しみだな。次は誰が来るのかな。

The who's who of the world seems to all be moving to Miami! Messi, the GOAT Argentinian futbol player, is now our neighbor! Introduced by David Beckham to a jam-packed soccer stadium on a day when there was no game, just a "Welcome Messi!" I was one of the fans that went to this rain-or-shine event. In true Miami fashion, it thundered and rained like the sky was having a party. I wonder who's going to move here next!

目次

第七十卷第九号(通卷八三七号)

表紙・ヤブウシの花(ピンボウズラ) 今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(203) Blue Shoe (2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫 (4)

歌集「草々」 今泉 米子 (5)

昭和61年十月号作品 大須賀寿恵 (6)

昭和61年十月号作品 夏目 勝弘 (7)

『歌集 八千代』 岡本八千代 (8)

スーパームーン 弓谷 久子 (10)

パタゴニア 今泉 由利 (12)

文月に入る 安藤 和代 (14)

手を振る 清澤 範子 (16)

初成り 山口千恵子 (18)

地元 杉浦恵美子 (20)

期待 伊藤 忠男 (22)

庭中改修「そのⅢ」 白井 信昭 (24)

「はい」「いいえ」 矢崎 直人 (26)

『いこよせ』 『こーはとぶ』

吉見 幸子 (28)

牧原 正枝 (28)

森 厚子 (29)

水野 絹子 (29)

牧原 規恵 (30)

稲吉 友江 (30)

鈴木美耶子 (31)

大武 智子 (31)

現代学生百人一首 東洋大学

村上 翔太 (32)

黒木 薫里 (32)

小室 華凜 (32)

武藤 太一 (32)

宮本 和奏 (33)

大川 楓 (33)

富田 涼太 (33)

武田 衣未 (33)

植村 公女 (34)

木村 歩歩 (34)

今泉 如雲 (34)

矢崎 直人 (35)

今泉 由利 (35)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集 (36)

五感を澄ませば(15) 杉浦恵美子 (38)

附録(十五) 矢崎 直人 (40)

『「異常が異常でなくなる」恐怖』

楽しい時間(130) 中屋 保之 (42)

『酔いの徒然』(137) 山本紀久雄 (44)

『ナラシンド』どんどん音頭 丸山酔宵子 (46)

絹の話(154) 高橋 育郎 (48)

『江上浩二の独り言』 今泉 雅勝 (50)

初狩便り22 江上 浩二 (52)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬 花野みぷり (54)

康鍼治療院 本田 勇気 (56)

『新涼書を読む』 玄翁 (58)

編集室だより 殿山 木風 (60)

『三河アララギ』について 今泉 由利 (62)

(64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

大明竹のあひだより射す光あり冬苔の黄にかがやくしばし

わが老いのひるのねむりを目守るもの來りまた去る目白うぐひす

木下には鳥のもたらししかくれみの切込みふかきをさなほ稚葉の苗

陸奥の赤湯にわれの友ありて香ぐはしきかな保呂羽の餅は

露の臺咲けるうへをも縦横に踏んづけながら枯枝はこぶ

午後はやくまなこ眼つむりてわが命いくらか伸びむと沈黙をする

くれなるとましろと馬酔木ふたもとありおのおの各々こぼすこまかきものを

庭中の大眞椿に花満てり花ゆらぎつつ甘き露こぼす

満開のさくらの花の下枝を撓めて子の手に觸れしむるばかり

小枝挿して枯れず生きゐて花ひとつひらかむとするしきみ櫛不可思議

歌集 「草々」

今泉 米子

船積みの板打ちつけし梱包に十三やの櫛も入れたりといふ

アルゼンチンへゆきて住まはむ娘は包むめうがやの白き足袋二十足

筍の二節ばかり皮脱ぎし庭見めぐりて發ちてゆきたり

汝が父は船出の汝に朝露の庭に咲きたる海芋を剪りぬ

福島はたごの煤け織機も吾が娘の乗るぶらじる丸に積まれてあらむ

海賊でも來ぬかとおどけ書きてくるパナマ越えゆきし吾が娘のたより

ブエノスにてつひに生きゆかむ日本の染織圖案學びたる娘は

ゆきゆきてみ冬の國に着きにけむ夢あぢさゐに今日も雨の日

圖案のため寫生せし汝のベニハベコニアのはな咲く鉢をわが部屋におく

ブエノスアイレスに新しき暮らし始むるに七月の冬日短きをいふ

昭和61年十月号作品

大須賀寿恵

指先の疲れを思ふこの夕べ法師蟬鳴く澄み透る声に

ベランダより吾は見てをり珠黒くなりたる数珠玉のなびく一叢

窓硝子に降りかかる雨の条細し母は織りぬき緋木綿を

茶褐色となりて垂れぬる糸瓜一つ同じき色の蛙すがりて

撓みつつ白萩ましろのこの家に吾は生れき六十七年前に

胸の上を通りゆく風涼しくて今少し寝むと眼をつむる

掬ひ来し夜店の金魚が鉢の底に生き残りをり朱の一尾

独りなれば豆腐の味噌汁に目刺し副へて巨峰七粒けふの昼餉は

数珠玉の擦れ合ふ音のやさしさに洗濯物を干し終はりたり

葉の上に花落としつつ咲き続く朱の房花の木立ベゴニア

昭和61年十月号作品

夏目勝弘

木蔭なき長興寺の石段上りゆき青く黒づむ大きな碑

碑に手触れてゐたり秋となる日差しに温もる温もり親し

三河の海見晴かず宝の御寺ああ鉄筋コンクリート造りの白亜

海よりの風に棕櫚の鳴り騒めく宝の寺の明るさ淋し

長興寺いでて蜜柑畑のなかの道萩原神社の方定めつつ歩む

大仏の頭部にも似る碑ぞ杳の文字に今対ひをり

あと一尺土に隠せば緑泥片岩の碑はますます大きく見えむ

長興寺萩原神社入覚寺我等のみ知るは楽しかりけり

目的を持たず真夏日の光の下汗出して歩くは楽しかりけり

水飲みに起きてきにけり風呂場より水琴窟と同じ音する

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

最後の補習テスト受けある生徒等にしばらく見しむ霽ふりしきる窓を

みぞれ降るけふはみぞれの詩を生徒らに読まむと持ちゆく賢治の「松の針」

女教師のわれに抗ひし良三も春樹も康も卒業して行く

海こえて南風吹く校庭にワルツステップ女生徒らと踏む

一本の給食牛乳瓶をさがしつつ校舎めぐりぬ主任のわれは

転出の君が置き行きしシクラメンの真紅はいつしか淡くなり行く

又の名をペンペン草とも言ひますと今年もなずなをわが教へをり

生徒らに婆ちゃんといふ渾名にて呼ばれることにも今は馴れたり

「体だけは先生大切に」と作文の隅っこに夏きくれし末則を思ふ

母われの教師してゐる西浦の中学に今年吾子進みくる

ヒヒラギの花のこぼるる庭に出でて休みの今朝は歯を磨きをり

台湾の土産にもらひし陳年紅酒寒の夜更けに夫と飲み合ふ

金柑の黄になりし実をあまさずに今年は吾子に砂糖漬する

この春に中学生になる吾子の紺のスカートの縫上げを解く

わが誕生日わが言ひ出さねば誰ひとり気づくものなく一日暮れたり

スーパームーン

豊川 弓谷 久子

縁先に佇ちて仰ぎぬ夜の空ぽっかり浮かぶスーパームーン

「うそみたい」と子と話し合ふ余りにも現実放れの月の風景

月に帰るかぐや姫思いし幼なき日竹取物語が心に浮かぶ

今頃は笹百合の花咲きをらむ早苗田見下すふるさとの山

笹百合に桔梗竜胆故郷の山は子供の私の遊び場なりき

古戦場跡と聞きぬし山道を一人歩くが大好きなりき

先取りと子が呉れ行きぬ昼食は土用丑の日の鰻弁当

蝶の舞ふ姿さながら伸び立ちし白蝶草が風にゆれをり

風透る庭の日陰に置きし椅子花を眺むる我が専用の椅子

隣家の庭木に啼くか余りにも蝉の声間近し夜明けとともに

蝉時雨に包まれ始まる一日今日も猛暑は続きゆくらし

母の吐息聞こえる心地す人一倍暑さに弱き母なりき

産院のあの日の朝より六十五年今日は我が子の誕生日なり

金野より今年も頂く夏野菜真赤に熟れているトマトも嬉し

先知れぬ猛暑が今日も続きをり雨降らぬまま葉月となるか

パタゴニア

東京 今泉 由利

一億二〇〇〇万年まえにして首長キアルゼンチノサウルスパタゴニアを闊歩

地平線まろみをおびてパタゴニア一日の太陽今沈みゆく

地平線まで続くカンポ大草原無限の螢の飛び交ふなかを

地球なるパタゴニアの大平原小さく小さな矢尻を拾う

真地球にわきい出こし水にしてシーバス・リーガル・ミズナラの酒

アカニシ貝のパープル腺の紫の明るき発色なぜか悲しい

大草原にてドン・セグンド・ソンプラは口数少ない男でありと

縦横と高さもあり空間に今日の考えごとをまとめる

目に見ゆる円の面積に慣れてをり小さき誤差のあるを知りつつ

朝の陽は細き金の線となり常の景色に耀やき添える

新しく今朝より始む人生に太陽のぼる金色なして

誰彼の命令ではない朝の陽の長く伸びたり私の影

思い出のマテ茶を飲もうボンビリヤにマテ茶葉入れる熱とう注ぐ

細心と大胆と自身の心を探しつつ自分の好きな自分をつくる

リカルド・グイラルデス作ドン・セグンド・ソンプラを読みました七月の日々

文月に入る

豊川 安藤和代

立葵一番上の花咲けば空青くして文月に入る

若き日に朝市ありし神苑の今日は数羽の鳩が寛ぐ

長々と雨今の列登校の青田の道よ今朝は華やか

森、谷川、千両、六角、三蔵子、町の名楽し豊川の空

伝えたき事があるのか青もみじ歌詠む窓に揺れて半日

文殊様仁王に投げし力紙幼な日遠く健やかなる今

足長蜂アリにひかれて庭をゆく御輿の如く囃子も聞こゆぞ

神殿は厳かにして夏祭り祝詞朗朗暑さ忘るる

四世代十人の暮らしなつかしくひとり昼餉のひやむぎすすする

看護師の細く真白きその指に見とれいる間に採血終る

平和です去年のままに芽を出して大輪に咲くアマリリス紅

フレイルを心配くるる娘いて今日ほうな重元気もりもり

お稻荷の時を告げいる梵鐘に羽音も高く鳩の飛び立つ

肥えづきし青田さわさわ峰の雲もくもくとして本宮を抱く

暑き日の続けばため息光る汗ひかる茄子椀ぐ雀色時

手を振る

春日井 清澤 範子

夫はまた心不全にて入院す食事療法にて冷たい風の吹く日に

コロナ禍で面会出来ずただ遠くから手を振る君に会える一瞬

献立表にある玉ねぎ刻めば塩分は○にてことこと柔らかく煮る

一日を通して一五〇〇カロリーにおさえること吾きもにやきつく

アララギを読む時間もしばしの間気がつけば早や五時をまわれり

胡瓜とわかめの三杯酢少し甘みをつけて一品

吾は整形にかかる身でありながら夫と娘の食事に悩む

タリージエと言う名の薬飲み居ても腰から足へ痛みは走る

吾が腰痛と十年も診て下されし前田先生徳洲会病院徳島へ帰ります

梅干の8%の塩分もとれなき夫心淋しも

軒下をゆるする風にもリズムあり寒さ感ずる今宵吹く風

夜明けと共に小鳥の囀り目をさますひととき鳴いて何処へ行きしか

武者隠し付くる室には出窓あり冬晴れの日の明るかりけり

低気圧高気圧と天気予防士はまだまだ寒し雪だるまと風

わが家三人病院受診が五科にして五日続くよ娘の運転

初成り

豊川 山口千恵子

草畑を耕やし植ゑる野菜苗胡瓜とピーマン茄子の苗

初成りの胡瓜を二本朝もぐ手のひら刺せる刺とげ痛き

わが庭に成りし野菜の諸々は曲りし胡瓜虫くひの茄子

窓の辺の楓の徒長枝やすやすと切りてくれたり梅雨の晴れ間に

わが住めるこの集落も変はりたり聞かなくなりし燕の囀

幾日も神社の庭の片隅に乗り捨てられし自転車一台

一面に拡がる植ゑ田の稲の青手植ゑしたるも杳かとなりぬ

田の上を飛び交ふ燕の姿見ず大型機械に植ゑられし稲田

息つめて腕に止まれる蚊をつぶすもうすでに人の血すつてきた蚊

ガラス瓶時どきゆらし様子見る梅シロップの出来上がり待つ

漬け込みし梅シロップのガラス瓶氷砂糖とかさむときどきゆらず

庭隅に植ゑしゴーヤの稔りたり一番大きくなりし一つとる

ごつごつとしたるゴーヤの青き果のずつしり重きを持ちて楽しき

縫ひ上げし水玉模様のエコバッグ出来栄えの良ししばし眺むる

端切にて縫ひし大きエコバッグ贈らむ人を思ひてをりぬ

地元

蒲郡 杉浦恵美子

買ひ忘れないか店内一巡り明日は我が夫十三回忌

お客様に愛知の地酒何が良いやはり関谷か棚前うろうろ

関谷酒造ひとつにしても数多し下戸のわたしに選ぶは難題

お客様ひとりには夫の同級生隆文はとの呼び捨て嬉し

杉浦さん隆文呼び方違へども彼等の話題に夫は生きてる

こんなにも愛されたるか我が夫は感謝の言葉は我に任さる

出し抜けに八百津訪ひたくなりけり法要が済み煎餅買ひに

八百津煎餅担ひ手俄かに減りしとぞ八十過ぎれば無理からぬこと

いまだきの嗜好に遠い煎餅の昭和の味は八百津に息づく

八百津煎餅ひとつひとつが手仕事の昭和のこの味噛みしめてゐる

蒲郡の花火か刈谷の萬燈祭いづれに行かうぞかち合ひし宵

萬燈祭三年月日が過ぎし後疫病退散一寸可笑しい

我が夫が迎へを待つ間に寝転びしベンチは今も駅南口

我が迎へ待つ間に夫は酔ひしれてベンチに大の字ふと思ひ出づ

十三年経ちても思ひ出色褪せぬ夫の映像駅南口

期待

大阪 伊藤 忠 男

入院の家内に電話あれどこにこれどうすると情けなきかな

入院の家内恨めし家事仕事こなす辛さが身に染みるなり

退院し家内自宅に戻れども家事に介護がまだ続くなり

歳になり変わらぬことが幸せか共に昔のそのままなりや

友元氣弾む会話に力ありビルの谷間にそよ風が吹く

友と会い気楽に食事力湧くこれでこの夏耐えられるなり

何がどう何がどうあれ何となく背筋寒きや何かの予感

核兵器持ったもの勝ちそんな世を招くことなどあるはずもなし

人類の破滅を招く核兵器今や抑止の域こえるなり

もう二度とおこすまいとの誓いとて犬の遠吠え今微かなり

冷茶飲み暑さ凌げど落ち着かぬ身体火照りて寝付かれぬ夜

雷鳴の轟く空に金色の光の刃雲を切り裂く

打水に風鈴うちわホウズキも死語になりたりこの頃の夏

雨が止み雲間に見える鱗雲秋の気配かもうすぐそこに

蝉の声聞きて見上げる夏の空雲一つ無く澄み渡るなり

庭中改修【そのⅢ】

豊川 白井 信昭

妻と孫玄関近く「どろ団子」われ生垣に囲を直す

大雨の線状降水帯一夜明けR23渋滞にはまる

星越の海岸通りまたしても傾崩れしか一区間通れず

貰^{もら}いたる蛍石あまた生垣に敷くべきものとわが心得る

雨降りのカーポートの内蛍石を洗い篩^{ふるい}に分別仕分

一本を花壇の中に残しつつニオイバンマツリ大方枯れぬ

息子と孫嫁と来たりて「父の日」と装具の銕くれてゆきたり

茂吉筆跡の「引馬野・安礼乃埼」碑傍らに御影石の碑一つ加わる

み社の境内にして亡き師により令和のみ代に四基を数ふ

生垣の一つ根本に新たなる薔薇の芽生えて赤き二花

大塚の十字路角の四季桜下り来し店に妻と幾度も

テーブルに二人して先ず一杯の冷えしルイボス茶笹の香ぞする

茜さすみ社の森楠の影深くなりつつ大き落日

生垣に余すところの囲沿い水仙の球根小まめに植えむ

生垣のグラデオラスの朱の花LED灯る光の中に

「はい」「いいえ」

埼玉 矢崎 直人

障がいのある方々と向き合ひて一人一人の人を見出す

生きている私はここに生きている映画「帆花」の命の叫び

かの人の関わり一步一步ずつ人と地域を深くつなげて

電子音心にとどむ岩槻の城跡の森蟬の鳴く森

様子みて日々の暮らしのその中で違いがないかいまを見つめる

中庭を眺める部屋に寄りて来る人の居られる場所に溶け込む

かの人のかの人自身のコトノハで語りてもらふことのできるか

「はい」「いいえ」二言三言うけとめる意思の表示を逃さぬように

梅雨明けて蟬の鳴き声三カ月働きはじめて今の職場で

模擬試験案内を見て考える受ける試験の受験の計画

郵便の配達の人雨の中頭を下げ配る郵便

梅雨の闇中村哲の平和展写真に残る意志の眼差し

夏祭り花火大会四年振り駅にポスター貼られ賑わう

逃げだした犬追いかけてまた逃げる犬を女性が追いかけていく

アフリカのティンガティンガのアーティストキリンの愛の目玉は丸く

『いっよよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

梅雨入りの庭の紫陽花にぎやかなり花数多くとりわけ見事

吉見幸子

蒲ファイルの演奏聞きに夫と二人立派になられた梨予さんを見る

会食は孫の祝詞に始まりたりステーキランチ六人揃ひて

鎌の先赤きテープは巻かれゐる麦刈りをする二年生とする

牧原正枝

「左手にしっかり麦を握ったね」鎌を手前に引くを見せたり

ザクザクと鎌の切れ味感じたか順番待てず「鎌がたりない」と

側溝に水あふれ出しこの大雨川のごとくに坂道を流る

森 厚子

傘すぼめ必至に支へ一歩づつ大雨の中辿り着かねば

線状の降水帯のこの大雨あちこちの町が水に浸かるとは

五能線に乗りて北へとゆきゆけば夢語りし日の君に会へむか

水野 絹子

「高齢」と我も呼ばるる齢となり腑に落ちぬまま年経(ふ)りゆきをり

真つ青の紫陽花今年は赤みさす捨て置きし我を叱るかのごと

城山の祭りにむけて草取りす老いも若きもなごやかになりて

牧原規恵

久々の町内総出の行事あり作業しながら会話はづみて

遠く住む娘に送る宅急便われの育てし野菜あれこれ

早苗田は青田となりて清々し目を閉ぢ今日は初夏を吸ふ

稲吉友江

梅雨さなかレモンイエローの傘差せば雨音軽く心も軽く

少しだけだけ心に余裕できた朝玄関に植ゑむペチュニアのピンク

いつまでも残しておきたきカーネーション逆さに吊るせり紅うすきを
鈴木美耶子

デジカメを再び使ふにまづ充電それからそれからリビングを撮る

セルフタイマー使ひて撮るをしてみるに早もカシヤツと音のするはや

ワグネルのクーデターの記事読み終へて人を裏切ることふと思ふ
大武智子

いつしかに夾竹桃の季となり梢に紅くかたまりて咲く

喫茶店の開店を待つひとときを畦道の花摘みて束ねる

現代学生百人一首

東洋大学

体育館カンカンキュツキュツと鳴り響くシューズとボールのすてきな音色

福島県立平工業高等学校一年 村上 翔太

リモートで授業はじまり映る部屋勉強よりもそうじ頑張る

茨城県立鉾田第一高等学校一年 黒木 薫里

顔加工男に変身してみたら「パパにそっくり！」シヨツクな私

茨城高等学校一年(茨城県) 小室 華凜

くだらないそれが将来何になる鼻で笑って憧れる僕

茨城高等学校一年(茨城県) 武藤 太一

相葉くん櫻井くんも祝結婚私も一応一般女性

茨城高等学校二年(茨城県) 宮本 和奏

発表中私の声が遅れてる私は困惑画面は爆笑

鹿嶋市立平井中学校三年(茨城県) 大川 楓

賢さをスマートフォンに奪われる操作されてる君の日常

東洋大学附属牛久高等学校三年(茨城県) 富田 涼太

ピカピカに磨いたフルート出番なく涙にぬれたコロナ禍の夏

埼玉県立川越女子高等学校一年 武田 衣未

『俳句』

書道展出で夏昼間の百日紅

植村公女

轟音は空の片隅秋日影

空席のまま終点八月尽

手術終え病院のカフェアイステー

木村歩歩

泳ぐより置換手術の伝道師

骨ばって項垂れてなお夏の脈

孤独死に窓開け放つ五月闇

真宗の経染み渡る水無月夜

玫瑰や津軽三厩まで百里

今泉如雲

青々と天満宮の茅の輪かな

三遊亭^{みよ}美^しよしてふ若き二ツ目五月晴

蝉しぐれ城址の森の上映会

矢崎直人

蝉の鳴く道を歩みて行く職場

さるすべりこたえを探しつづく日々

夕立ちや中庭の窓叩きつけ

武蔵野を赤く赤くに大西日

初月の空にしあり飛行中

今泉由利

葛くずの花葉つばと根つこと葛湯と

山百合は思ふ存分咲きにけり

父は居ぬ母も居ない秋立ちぬ

飛行機の窓にもあり盆の月

サイカチは加瀬か良布知らふち乃岐薬用果のき

蠟質ろうしつに被おわれてゐて蓮大葉

朝顔の萎ぼまぬうちに描かむよ

虫眼鏡もて描きゆく貧乏葛

狗尾草えのこ何だか好きだ田の小道

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

庭地藏女郎蜘蛛めが通せんぼ

木風

水まいて地藏に虹の立ちて消え

水浴びて庭の地藏も涼しかり

山荘を覆いて厚い雲の波

君恵

木々繁り山里の灯のちらほらと

バス待ちの子等のひたいに汗流る

千曲川岸べにゆれる月見草

郷泉

母ははの日に母カタカタと泣くカラスかな

金子

見送りはいつも淋しや孫の夏

雄山

木洩れ日は風に吹かれてなをまぶし

ゴンドラより「お身拭い」さる盧舎那仏

由利

輪郭のすつきり涼しい白鳳仏

釣舟草描かむとして揺れにけり

降る雨の重さに橈むねこじゃらし

弥生期を今に繋ぎて稲の花

五感を澄ませば (15)

杉浦恵美子

鶏頭の

キンキンに冷えたビールが恋しい（私は不調法なので想像）季節になりました。

さて呑み会のはじめによく「とりあえずビール5、6本」などと注文しますよね。

よく考えると二箇所です不思議な言い回し。

一つ目、「とりあえず」。意味は「まずさしあたって、一応」。つまり一杯目は全員が同じビールで乾杯しましょうという意味になるかと。但しこの語は軽めのニュアンスがあるのでビジネスシーンでは使わない方が賢明だろう。

二つ目「5、6本」。結果、5本だろうが6本運ばれようが何の違和感もなく、めでたく呑み会が始まります。でも外国人にしたら不思議な言い方でしょよね。

これらの表現から日本語には断定を避ける傾向があると感じます。逆に「最初はビール3本と日本酒2合、あとこの人は呑まないからお水で結構」などと注文したら何だか堅苦しくて打ち解けにくそう。

曖昧さこそ親しみを感じさせる効果ありと言ったら言い過ぎでしょうか。

TVの転職のCMで「やめようとしたのをやめるのをやっぱやめるわ」「どっちだよ」というのがあります。見る度にクスツと笑ってしまいますが、よく考えれば当然「転職しよう」と言っているのだから、これなど断定を避ける日本語の特徴を逆手に取った面白い表現なのかも。

さて本題。あまりにも有名な正岡子規の句、

鶏頭の十四五本もありぬべし

この句の評価を巡っては昭和二十年代に「鶏頭論争」が起こり、今も評価が分かれるらしい。要約すると『十四五本も』を、『七八本も』と置き換えても問題ないから駄作」という論と「寝たきり状態にあった作者の想いを含めて解釈すべき」という論の応酬。

しかし、作句から百二十年余、論争からも半世紀以上も経て、改めてこの句を味わってみると「鶏頭論争」などどうでもよく、百年以上生き抜いてきた名句としてみ感じられます。

十四本かもしれない、十五本とも決めつけるな、と。ここには断定を避ける日本語の特徴が見事に生きています。日本語でしか表現できない世界です。

こういうのは「曖昧」「婉曲」「ぼかし」などと呼ぶ表現に分類されるでしょう。

諸外国の文化が入り込んでいる現代では、これらは得てして否定的にとられる傾向がありそう。

しかし私はこれこそ日本語の、延いては日本の文化度、成熟度の高さを示す例だと思えます。例えば、

白黒つけるのでなくグレー

車のハンドルで言えば遊び

一見無駄な空間に思われる床の間

漢字平仮名片仮名及び複雑な敬語の存在

などの感じ。これらがなかったら、シンプルかもしれませんが、きっとギスギスした関係性になってしまいうでしょう。

ところで、万葉集・古今和歌集・新古今和歌集などには恋の歌が多く採られています。万葉集以外は、どんなに烈しい恋の歌でも現代人の我々にとっては婉曲的に感じられます。日本人は昔からたとえ恋でも我を忘れないのですね。

だから平安の深窓の姫君の送り主への返歌は、大抵侍女の代作というのも領けます。

烈しい恋などしようにも出来る環境にはいかなかったでしょうし、烈しい恋などは日本の自然の四季折々の繊細さにはそぐわないでしょうから。

曖昧表現から横道に逸れてしまいましたが、事程左様に日本語日本文化は日本人にとってもきちんと把握しているかどうかを自問してみる必要があります。

恋の歌作ったことなどあったかなあったとしても忘却の彼方

附 録 (十五)

矢 崎 直 人

【蟬じぐれ城址の森の上映会】

市民会館いわつきホールで、社会福祉法人ささの会二十周年企画 映画『帆花 ほのか』上映会 in 岩槻
字幕付き上映&トークイベント）がありました。

映画『帆花』（監督・國友勇吾 2021年/日本/72分）は、岩槻に住む帆花さんの三歳から小学校に入学するまでの約三年間を撮影したドキュメンタリー映画です。帆花さんは、生後すぐに「脳死に近い状態」と宣告されました。常に見守りが必要で、母親の理佐さん、父親の秀勝さんといろんな場所に出かけ、絵本を読み聞かせ、お風呂に入れ、吸引をする日常を積み重ねています。何度も命の危機を迎えながらも果敢に乗り越える、生きる強さがあります。

人工呼吸器や痰の吸引が欠かせない中、医療機器の電子音の合間に、時々発せられる帆花さんの声が混じります。ご家族の働きかけや医療ケアのスタッフ、先生の働きかけに反応している様子に、介助する姿勢と帆花さんの意思をどう感じ取り受け止めているのかが伝わってきました。

当日は、國友監督のトークショーと最近の帆花さんの映像の上映、高校二年生になられた帆花さんとご両親、伊藤佳世子さん（千葉市中央区障害者基幹相談支援センター）、遅塚昭彦さん（さいたま市自立支援協議会）、長岡さ

ん(ささばし)の進行で行われました。

二〇二一年に「医療的ケア児支援法」という法律が成立しましたが、複数の障がい重なっていたり、障がいの重さによっては制度や支援が受けられない現状があることを教わりました。帆花さんが住んでいる集合住宅の方がこのイベントのポスターを作られたり、緊急の場合にどう避難するかを相談しあつたりと、帆花さんの存在が住民の方々を繋いでいるのが興味深かったです。生きることに困難を抱えている方々への想像力が必要とされています。

生きている私はここに生きている映画「帆花」の命の叫び

かの人の関わり一歩一歩ずつ人と地域を深くつなげて

『異常が異常でなくなる』 恐怖』

中屋保之

「今年もあの暑い夏がやってくる」。夏の高校野球、広島・長崎への原爆投下、終戦の日等を迎える時、新聞やTVでよく目にする決まり文句である。加えて今年は、「命にかかわる異常な暑さ」で、気温四〇度近くを記録する地域も少なからずある。気象に関して言えば、「線状降水帯」なる言葉も頻繁に耳にするようになった。これらは、つい数年前には珍しい現象を表す言葉であったと思う。それが今では、私たちは日常語として接している。異常が異常でなくなる。恐怖を感じざるを得ない。かつてバブル最盛期に、司馬遼太郎氏が旅客機から乱開発で荒れつつあった国土を眺め、異常が異常でなくなる。恐怖に警鐘を鳴らしていた。かくいう私も、当時証券界に身を置く一人として、その後のバブル崩壊で、異常が異常でなくなる。恐怖を体験することになる。

様々な過程があったにせよ、第二次世界大戦という惨禍を招いた要因にも、異常を異常と感じなく、なった（あるいは意図的にさせなかった）ことがあるのではないだろうか。

最終兵器としての『核』についても昨今、異常が異常でなくなる。恐怖を感じる。北朝鮮による日本海への度重なるミサイル発射実験やロシアによるベラルーシへの核兵器の戦術的配備などは、今のところかうじて、異常。どの認識が勝ってはいるが、いつ、異常が異常でなくなる。かという「恐怖」は拭えないでいる。唯一の戦争被爆国である我が国が、そうした「恐怖」が現実とならないために何が出来るのかが問われているような気がする。そしてそれは、この季節に限らず常に念頭に置くべきなのである。

翻つて、異常を言い募ることですそれを麻痺させる動向には、よくよく目を凝らし注意を払うことが大切である。徒に危機感を煽り、世論を誘導してゆく手管は古今東西よく使われる。個人的には、憲法改正」を是とする論客の中にその傾向を見出すことが多いように思う。また、否とする人々にも同様の懸念は、ある。

中学生のとき、「日本という国は、憲法第二章で《戦争の放棄》を宣言している、世界で唯一の国なんだよ」と聞かされ、素直に誇りに思った記憶がある。世界情勢が大きく変化した時代に、様々な考えや主張があつて当然だが、戦争が「悪」であることに変わりはない。「悪」であるはずの戦争という『異常が異常でなくなる』恐怖』が眼前に広がっているようで心配である。《戦争の放棄》が異常などということは、決して無い！と思いたい。異常の文字が、日常に書き換えられることのない世界が続くよう願うばかりである。

なにはともあれ、異常な酷暑とは、早くおさらばしたい。異常は異常なのだから・・・

涼風の 曲がりくねって 来たりけり

小林一茶

楽しい時間 129 山本紀久雄

2023年7月31日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十五

明治天皇は、国会開設の期日について参議から諸見解が出されていたが、頭から明治23年（1890）と決めていたのではない。筆者はこのように考えている。その根拠は、明治23年が「皇紀2550年」となることで、神武天皇創業を定めた明治天皇にとっては、皇紀紀元には強い思いがあった。ここで皇紀紀元とは何か。これの説明が必要となる。

明治5年（1872）に神武天皇即位紀元を制定するまでは、紀年法として元号や干支を使用（あるいはそれらを併用）しており、ある年を基準として経過年と遡及年により年を数える「紀元」という方法は用いてこなかった。

だが、明治維新後、政府は西洋に倣って、曆法を改め太陽曆を採用するとともに、紀年法として紀元を使用することにした。以下がその際出された「太政官布告第三百四十二号」である。「今般太陽曆御頒行神武天皇御即位ヲ以テ紀元ト被定候ニ付其旨ヲ被爲告候爲メ来ル廿五日御祭典被執行候事 但當日服者参朝可憚事

―「太陽曆御頒行 神武天皇御即位ヲ以テ紀元ト定メラルニ付十二月二十五日御祭典」（明治五年太政官布告第三百四十二号）

口語体に要約すると、「このたび（天皇陛下が）太陽曆を頒布され、神武天皇の御即位を紀元と定められたので、その旨を告知されるため、来たる25日に記念式典が執り行われることになったので参内する資格のある者は出席すること。ただし25日が喪中とな

るものは参内を遠慮すること」

神武天皇即位紀元がいつであるのかについては、具体的な年数に對する記述説明はなく、「神武天皇即位を紀元とする」とのみ述べている。『日本書紀』に基づいて、神武天皇即位紀元の元年を西曆紀元前660年に相当するとしたのである。

つまり、紀元の元年を天皇制の始まりとしたわけで、これは正に天皇の歴史と国の歴史を一致させたことになり、日本国家の歴史認識を明治天皇によつて画期的に変更決定されたのである。

したがつて、自ら紀元を決定したのであるから、明治23年が皇紀2550年という記念年であること、これを明治天皇は十分に認識し承知していた。だからこそ、国会開設年を紀元記念年にしたのではない。これが筆者の考えである。

現在では「神武天皇即位紀元」、通称は皇紀、皇曆、神武曆、神武紀元等とも称されていたものは、戦後の昭和23年（1948）に廃止されているので、今では知らない世代が多いが、この当時の国民は熟知していた。

明治天皇は、天皇自ら決断する政治判断決済する事例が、明治13年（1880）頃から発生しはじめ、その後も天皇の決済を仰ぐことが増しつあつた。

グランド將軍から受けた外債発行警告のようなアドバイスは、国内では考えられず、薩長による派閥政治であるから、両者の見解は常に真つ向対立する。

その対立軸からどうやつて天皇自らの見解を整理し、意思決定すべきなのか。その判断基準の構築がなされないまま、課題・難問が次から次へと繰り出されてくる。

明治国家という新しく激しい時代が動き出しているのであるから、当然ではあるが、それらの諸問題・課題に対して天皇はどのよう

な意思決定するのがベストなのか。明治天皇の模索が続いた。

ここで必要なことは天皇の「脳判断基準」である。自らが国家統制者として何を以て判断し、その決定が妥当なのか、それには何を基準として身につければよいのか。

このために必要なことは、天皇としての自己判断力を構築すること、つまり、天皇としての「背骨」の構築が必要ではないかと思ふように至つたはず。

『明治天皇』（伊藤之雄著 ミネルヴァ書房 2006年刊）で《1890年（明治23年）代以降に絶妙の政治関与を行つていた明治天皇》と評価している。この「絶妙の政治関与」に何があつたのだろうか。それを大胆に述べるならば「思考方法の大転換」ではないか。

通常、多くの人は「今から目標年に向かつて何をするか」を考へ、計画化する。

しかし、明治天皇は「目標年から現在を見て、今自分は何をすべきなのか」という思考方法を採用したのではないか。この二つの思考方法、結局は同じアプローチではないか。と思われるかもしれないが、根本的に異なる。「目標年から現在を見て、今は何をするか」は、目標年には「こうあるべき」という明確な姿を所有しているはず。だから、その姿と比して「今は何が不足しているか」が明らかになつて、その不足部分をこれから取り込もうと努力できる。しかし、通常の「今から目標年に向かつて何をするか」は、そこに向かつていく途中で、当然に時代の出来事から、物事の変化が生じるので、それに合わせて目標を変えやすい。政府や企業の計画を見ていると、大体このパターンが多いのが実態である。

これが一般的な将来プランの立て方だと思ふ。だが、明治天皇は今の政治体制とは異なる国家統治権を保有する為政者である。

当時の明治天皇にとつて最大の課題は何であつたか。それは閣僚から上がつてくる懸案事項に対する「対処基準」の構築であるとともに、自ら対処する際の心理である。それは常に「平常心」で対応しなければならぬことであつた。

「平常心」を持ちつづ「対処基準」に従つて、妥当な判断を下せば、それは国家に役立つものに変化する。そうでない場合は却つて問題をこじらせることになりかねなく、その差は時間経過とともに大きくなつていく。

国家指導者としての判断が国の将来を決定するのであるから、明治天皇の「対処基準」は特に重要であり、判断する際には常に変わらぬ「平常心」を保つことが不可欠である。

近くを見渡せば「大悟」を経て、常に「平常心」を持ち得た鉄舟がいる。鉄舟と同じように「平常心」を持つ必要がある。だが、自らは国家の頂点にいる身であり、鉄舟のような個人的修行をする時間はないし、その方策を採る気持ちもない。

必要なのは「平常心」で対処できる判断基準であつて、今はそれを持ち得ていないのであるから、新たに構築するしかない。自ら創りあげるしかない。その「創りあげる」ものは何か。それは「憲法」につきる。自分が納得し、国民も受け入れる「憲法」の策定こそが「自らの判断基準」になり得るのだ。

このように明治天皇は考えたに違いないだろうし、そうならば行動は貫してとれる。それは明治憲法を定め、自らが定めた紀元2550年の明治23年に憲法に基づく国会を開設することであり、それを閣僚に指示することであつた。

明治15年（1882）3月から明治16年（1883）8月まで、伊藤博文らを各国憲法調査のためヨーロッパに滞在させたのである。次号へ続く。

『酔いの徒然』（二三七）

丸山 酔宵子

『下関トラフグと博多祇園山笠』

日本列島を襲っている一連の豪雨は、九州北部や山口県を襲って大変な被害が出たようだ。そんな折、ひと月前から7月12日に下関で一献をと約束し、梅雨がまだ続くどんよりとした空の下関に着いた。

下関と言えばフグ。事前にWebサイトで高得点のフグ料理屋を探し、関門海峡を臨むフグ料理「平家茶屋」を予約したのである。行ってみれば将に正解、関門海峡に面した海の前で、壇ノ浦の合戦で平家一門が戦いに敗れ、安徳天皇も入水した関門橋の真ん前である。眼前には海峡が広がり、大型船やタンカーが行き交っている。

関門の汽笛も湿る梅雨深し

酔宵子

入り口では着物姿の女将が待ち構えており、広々とした玄関正面には、「阿部前首相」の大きな遺影が飾られている。7月8日が命日であり、将に安倍首相の地元で、「平家茶屋」を訪れた写真も飾られている。

トラフグと言えば下関で、下関のトラフグの旬は12月から2月にかけてであるが、夏のトラフグも捨てたものではないようだ。夏場のトラフグは、白子や卵巣にあった旨味が身に集まり、確かにふく刺しは身の締まりが良く、噛み応えも冬場より程よく固く心地よい。

トラフグや

夏はこりこり美味さ増し

酔宵子

「平家茶屋」でフグ料理を堪能したあと、仕上げにもう一軒と、平家茶屋の女将に紹介されたオーセンティックバー「エグザス」に。マホガニーがふんだんに使われたアンティークな内装とライブ・ピアノが流れる落ち着いた雰囲気、流石、国際都市のレトロな下関という雰囲気に溢れている。

仕事は下関で終わったのであるが、折角だから久々に博多で一献と小倉経由で博多に向かう。天神のホテルにチェックインしていると、ロビーに「博多祇園山笠」の巨大ポスターが掲げられている。

将に今日、7月13日（木）15時30分から、櫛田神社を出発し、天神・福岡市役所までの「集団昇き山笠

見せ」が行われようとしている。

ユネス無形文化遺産・国重要無形文化財「博多祇園山笠」はコロナ禍で、待ちに待った4年ぶりの開催で、7月1日から15日に渡って繰り広げられる。クライマックスは7月15日の「追い昇き山笠」であるが、13日の「集団昇き山笠見せ」もその勇壮快さは勝るとも劣らない。

腕時計を見れば、3時過ぎ、博多山笠を見るのは長年の夢であり、即、チェックインシタクシーで一路中州川端へと向かったのである。博多川に架かる橋を中心に交通規制が引かれ、大通り周辺は既に見物客で一杯。天神に向かう大通りの広い歩道の要所には、周辺店舗の従業員が大きなポリバケツに水を一杯にして、準備万端放水の準備をしている。

「3時30分、櫛田神社を出発しました。もう少し下がって、歩道に乗ってください。もう直です。」と拡声器でアナウンスがある。

「・・・オイッシヨ、オイッシヨ、オイッシヨ・・・オイッシヨ、オイッシヨ・・・」

と子供たちの元気な声がりズミカルに近づいてくる。祇園山笠「土居流」の活きのいい先行部隊で、長い卒塔婆のような木製札を掲げ、かなりのスピードで走り込んでくる。

祇園山笠

オイッシヨオイッシヨと声かけて

酔宵子

この祭礼は女人禁止、将に男の祭りであるが、老若男子は悉く、最小限の白い法被を着て、禪一丁ちんちようできりりと股間を絞め上げ、その腰には、山笠を引く凛々しい短い粗縄を腰紐に挟み、両尻を堂々と露わにするのである。これがまた、少年でも、壮年でも隠居風老人でも両尻を堂々と出している姿は、中々艶っぽく感じるものなのである。

活きのいい子供たちを先頭にした先行隊を揃えた「昇き山笠集団」は、総勢7集団が博多の街を疾走する。真夏の太陽がギラギラ照り付ける中、老人も壮年も若人も少年も、「オイッシヨ、オイッシヨ・・・」と、汗ぐっしょりで昇き山笠を引き、そこに冷たい水を頭から被って奮闘しているのである。

水被り

昇き山笠引くぞ尻出して

酔宵子

「ナラシド♪」どんどん音頭

高橋育郎

一、ハアー バラが咲いたよ 「ナラシド♪」どん

水鳥飛んでる 「ナラシド♪」どん どん

習志野生まれの アイドルだ（ソレ）

みんなで踊ろう 輪になって

空は青いよ 風さやか みどり豊かな ふるさとの街

「ナラシド♪」どん ハイよろしくね

二、ハアー シンボルマークは 音符だね

頭にアンテナ かわいいな

この街きょうも 奏てる (ソレ)

あしたもみんなで 歌おうよ

音楽の街だよ 胸が鳴る 文化のかおり 明るい笑顔

「ナラシド♪」どん ハイしあわせに

三、ハァー 翼パタパタ 大きな目

元気がいいね 頼もしい

みんなが大好き 「ナラシド♪」どん (ソレ)

拍手と歓声 湧きあがる

スポーツさかんだ 光る汗 輝く健康 未来を拓こう

「ナラシド♪」どん ハイどこまでも

絹の話 (154)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

絹と八幡神社、稻荷神社

神社の種類

全国に88,000社の神社があるとされています。それぞれ格があり、上位から

「神宮」皇室の祖先を祀る：伊勢神宮、熱田神等

「宮」：皇室にまつわる人物を祀る：日光東照宮等

「大社」：地域信仰の中心をなす神社：出雲大社等

「大神宮」：伊勢神宮の出張機関：東京大神宮

「神社」：一般的神社

「社」：大きな神社から御祭を申請した神社

に分類されています。

八幡神社

日本の神社の中で一番御多い神社は八幡神社です。5世紀初頭、応神天皇は絹織物などの優れた技術集団の秦氏を百濟から招聘し、国を富まし強力な国造りをして、大和政権にとって脅威の隼人族を成敗することが出来ました。応神天皇は八幡神として崇められて、各地に戦勝

の神として八幡信仰が広がって行きました。6世紀になって、大和朝廷は隼人族への戦勝と隼人族に睨みを効かす為、秦氏の力が強い豊後の宇佐に、当時百濟方面から伝わり始めた新しい仏教思想をいち早く神道思想に取り入れた「宇佐八幡神宮」を造営し、全国の八幡社の総本宮になり、秦氏が奈良の大仏建立にも莫大な資金的協力をして、伊勢神宮に次ぐ崇廟となったのです。

その後も秦氏の作る絹織物は朝服を作るばかりでなく大和國家の財政的な根幹を担って行くのです。

稻荷神社

稻荷神社は2900社余りと言われていますが、他の神社に合祀されている数を加えると八幡神社より多くなります。

稻荷信仰は稲作の始まった弥生時代初期より、稲の穂を背負うように豊作を願った民衆から農耕神の「宇迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ)」を自然発生的に信仰し、狐が春から秋まで山から里に降りて来て農作業を見守り、大切な米を食い荒らすネズミを退治してくれて、秋には山に帰って行き、その尾は稲穂の様にフサフサして豊穣を感じさせるので、狐を「神使」として崇めたと思われます。

歴史的には奈良時代の始め、秦氏は稲が豊かに実る京都伏見に稻荷大神を祀り、平安時代初期に朝廷から神階

が宝珠されると、京の人々から信仰を集めるようになり、伏見稲荷大社として神仏集合ではあるが、神道上のお稲荷さんの総本宮になって、江戸時代以降、町人文化が発達して来ると五穀豊穡の神から商売繁盛に重きを置いたの神様になりました。ところが稲荷神社の中には少数ですが豊川稲荷や岡山の最上稲荷のように仏教系の神社もあります。

豊川稲荷と犬頭神社

豊川稲荷の正式名称は圓福山豊川閣「妙嚴寺」という曹洞宗の寺院で、東海義易禪師が室町時代初期(1441年)に創建する時、6代前の寒嚴義伊禪師が宋から帰朝する船に乗った時、空中に神靈ダキニ眞天が稲穂を荷なって白い狐に跨って現れたという話を大切にして、寒嚴義伊が自ら彫ったという彫像を山門に鎮守したのが豊川ダキニ眞天で、豊作を願う人々にいつの間にか豊川稲荷と言われるようになりました。

本尊は寒嚴義伊禪師由来の千手観音菩薩です。同じお稲荷さんでも成り立ちが大分違います。豊穡を祈る人々の願いに違いはありません。

犬頭神社は豊川稲荷の近くの豊川千両町に640年頃(大化の改新の頃)創建された神社です。創建当時の社名は判っていませんが、祀られているのは保食神と繰糸姫神です。

保食神とは農業が始まった弥生時代の農業の神さまで、繰糸姫とは養蚕製糸の神さまで。

犬頭神社の縁起は創建から300年弱後に著された延喜式や今昔物語に記されています。それによると大切な蚕を食べてしまった犬を殺したところ、犬の鼻から二本の絹糸がとめどもなく出てきて、この地で採れる絹糸が犬頭糸として宮中に納められ、この地域が豊かになり、犬の頭が祀られるようになり犬頭神社と言われるようになったという事です。この地域が養蚕を含めた農業が発達していた事を物語っています。

農業が発展していた犬頭神社界隈を基盤にして豊川稲荷が出来たと考えられますので、犬頭神社と豊川稲荷は表裏一体の関係と思われまます。

豊穡と勝利への祈り

縄文化化は気温の変化で壊滅的な人口減少を見ました。それに続く弥生時代には稲作と養蚕が人々の移住と共にもたらされ、人口は飛躍的に増加して行きました。

人々は作物の豊作を祈り、人口を増やして行こうという願いが稲荷神社を生み、米や絹で国を富ませて集団を結束させ、外敵に勝利しようを願ったのが八幡神社で、戦国時代を通して全国津々浦々に広まりました。

「江上浩二の独り言」 69 江上浩二

家から富士山が見えても、富士から自分たちは分からぬ

都内には富士見橋とか富士見坂という地名は多い。何故かと、聞く必要もないであろう。其処へ行くと西の方向に富士山が見えるのである。私も結婚して45年、東京に来て51年も経ってしまい、あちこちにスカイスクレーパーが、始めは徐々に、段々と加速して行き、よきによきと雨後の筈のようにあちこちの猫の額を埋めつくす。と、ある時、今年が最後のダイアモンド富士山となりますと、突然身近の富士見坂の際にポスターや看板が並ぶのである。大概は最後のダイアモンド富士山の占有する遠くののっぴるにこれから住むであろう主の素性や懐具合に文句は言わない。

なぜか、ダイアモンド富士を撮っていた昔カメラ小僧と言われ、今や高級なデジカメセットを携える親爺さんは、その富士見坂付近の住人でないと予想される。ひよっとして、今後ダイアモンド富士を独り占めするスカイスクレーパーの

新住人かも知れないのである。ごちゃごちゃ、最後のダイアモンド富士を捉えようとするマニアと素人さんからなる群衆は互いに気にせず、いい場所取りをして、喧嘩沙汰にもならず、最後のショットを満足げに納め帰路に向かう。

実は、最近同窓会のお知らせを頂いて、コロナ禍で3年前に亡くなられた若かりし頃ご指導頂いた担任の先生の墓参をするので集合されたという主旨であった。

学校の先生が担任としてクラスを持った生徒たちの数、専門教科として受講した生徒たちの数を40年位の間先生と呼ばれ、運良くば、A先生はこの専門教科では当時素晴らしかったと言われるような伝説が残っておれば、相当な人数になるであろう。ここで、えいやつと40年×250人/年＝10,000人とする。約1万人の教え子のひとりが私である。

同窓会は3―5年に1回ぐらいのペースで開催していたが、最近、具体的にお話すると2011年（3月に東日本大震災があり、東日本地区で被災した大企業に勤めていたクラスメートも多く）、その頃の同窓会も延び延びになって、私も電子メールアドレスの変更届が上手くいかずに連絡が途絶えた。更に2019年頃からの新型コロナ騒ぎで、同窓会

は面と向かつての開催が出来なく、本当に今回の連絡が久々となった。

40代、50代、そして60代へ突入し、今年で皆70代となった。ここで定かでないのであるが、恐らく50代の同窓会の時、担任の先生にある思い出を詳細にお話した。最終学年（18歳）の授業の時、受験勉強の範囲外の数学のテーラー展開式（詳しくは高木貞治著・解析概論を参照）の説明をされて、黒板の左から右へ一杯に式をチョークで書き記したのである。ここまでであったら、こんな先取りの授業の話で終わって、家から富士山が見えてもで終わってしまうのであるが、私はさらに話を続けたのである。

x x 先生、大学に入学して更に所属した研究室（材料科学の修士コース、21―24歳）での研究内容の話をつけ、非線形関数を無理やりにテーラー展開で近似線形関数を作成し、それをもとに当時誰も挑戦していなかった観測した実験値とテーラー展開による近似線形関数を最少乗法で収斂させて式に含まれる材料の構造パラメータを求めることが可能になりました。

x x 先生はそうかい、そんなテーラー展開の説明をされたことをお忘れになっており、少々拍子抜けし吃驚したが、そ

んなものかなと思いをはせた。

多くの教え子がたった二人の先生を囲むようにして存在し、その教え子と先生との距離感やどのような付き合い・興味といった方向感がそれぞれあることがわかるのである。インフルエンサーという言葉が知られているが、確かに私は数学の担任の先生の影響を受けたが、現代版インフルエンサー講演に集まる特定のインフルエンサーの影響を受けたいとか、俺は私はインフルエンサーだと言う穿った気持ちを持ちたいのではなく、無意識の中で互いに伝播し合えばいいのではないかと思う。

私の記憶では、関東地域ではなぜか、富士を夕日の西に臨むのが普通で、富士見坂でなくとも平らで広々とした関東平野ではどこでも富士を眺むことができ、日光から浅草への帰り道、まだ富士が小さく低く望める東武線沿線、茅ヶ崎の実家の西向きの玄関から大山丹沢連峰と毎日見える富士、茅ヶ崎の海岸から西に顔を振り向ければスカイスクレーパーに切り取られることなく、自分の富士を箱根山の外輪山と好きに鎮座させ、楽しむことができるのである。



初狩便り
(22)



花野みぷり



穂揃期ほぞろい

今年の夏は本当に暑かった。初狩も35℃を超える日が続き、雨も降らず、作物にとって厳しい夏となった。真夏の田んぼで、蝗いんとうのあかちゃんらしい虫を見つけた。蝗は稲の害虫だが農薬の普及で激減した。私たちの田んぼは無農薬なので、蝗も発生してしまふ。まだ目も確認できないが、かわいい！

酷暑の夏だったが、熱帯の植物である稲は、この暑さが好きらしい。七月二十七日にはもち米のコガネモチが、七月三十日には、コシヒカリの出穂しゅつぼが確認された。例年より数日早い。稲は穂を出すとすぐに開花し、受粉する。稲の花の写真を載せておく。そして八月六日に「数日前に、穂揃ほぞろい期に達した」と報告があった。穂揃期とは、植えられた田んぼの場所で多少のばらつきはあっても出穂率が九割以上になったことを言う。出穂してから三五日から四五日の間で、全体の九〇パーセントが黄金色になったところが収穫の目安とされている。しかしこの季節は、台風が来たり、長雨が続きたり、人数の揃う土日にしようとする、稲刈の日の判断は難しい。

九月になると、蝻かまきりは大きく濃緑色になり、蜻蛉とんぼも飛蝗ばつたもいろいろな種類が出てきて、豊かな生態系が繰り広げられる。

(写真：菅野昌英)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2023年8月7日

この時期の湿度

大きな入道雲と不安定な天気 夏らしいですね

雨が降る前後 湿度が上がります そうしますと

高温と高湿度で 汗が蒸発しにくくなり

とこのことは 熱中症のリスクが上がります

首の痛み 肩のはり 吐き気 めまい 身体の固さ

などが出てくると熱中症の初期症状です

これに下痢などしてしまつと脱水症状になり大変です

水分補給は夏場に関しては 水 以外のミネラル分を多く含むものを

1日8回は小便が出る量を摂取して下さい

それでも湿度が上がると汗をかいても体内に熱がこもります

先の症状が出て辛いな と感じたら水分補給しつつ

首の後ろ 脇などを保冷剤などで冷やして下さい

涼しい場所でも注意が必要です

身体の変化が出たら

素早く対応していきましょつ

脂質の摂取も多くなり

ならないように気をつけましょつ

今日も笑いながら

行きましょつ



2023年8月9日
暑いながらも夏を

梅雨を彷彿とさせる湿度です

気温が高いより湿度が高い方がきつく感じます

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分 で

これから来る 季節の変わり目と冬に向けて

備えて行きましょう

気温が下がってくると

元気になってくるのが 蚊 です

本田カイロプラクティックの玄関先にも

蚊取り線香を常備しています

今年 は

金魚の蚊取り線香入れで

暑さの中 いらっしやる患者さんが

ホッと 一笑してくれたらと思います

昨日から曆的には立秋になりました

まだまだ暑い日が続きますが

蝸が鳴き初め トンボが飛び

夏が終われば瞬く間に年末です

もう少し夏を感じたいと思います

今日も笑いながら行きましょう



「秋の気圧の変動」

秋の季節は 変化の時
気温の高低 寒暖差
大きく 気圧も変動し
台風・雨風 増えてくる
気圧が高いは 右回り
空気の密度が 高くなり
青空・晴れて 雲は無く
交感神経 刺激され
血流が上がって 元気となる
気圧が低いは 左回ひだりまき
空気の密度は 低くなり
雲・雨・台風 発生し
副交感ふくこうかんが 優位となり
血流停滞 怠なげくなる
気圧の変化は 耳の奥
三半規管で 調節す

耳は腎の竅あなであり
腎精じんせい養う脳のう・髓ずいと
直結している感覚器
気圧の変動調節は
脳の安定 関与する
今時いまどき人の状態は
思慮過度 頭を使い過ぎ
スマホで眼精 酷使して
緊張・イライラ 食いしばり
耳の循環 悪くして
気圧の調節 鈍くなり
怠なげさやめまいと相成るなり
気圧の変化に勝つためにや
頭と目の精 休ませて
耳の循環よくするべし
耳を揉もんで 軽く引き
顎の開閉 運動で
めぐらせるのが秘訣なり
加えて熟睡できたなら
耳の機能が復活し
気圧も変化も難のその



「視野と身体」

ものを見るには視野があり
中心・周辺 お役目あるぞ
中心視野とは 眼科の視力
丸欠け 右やら左やら
ひらがな文字見て 検査する
焦点合わせる目の機能
視力が高けりゃ 目は開き
色を見分けて 見る力
上がりて 頭も働くぞ
中心視野が 衰えりゃ
眉間にシワが深まって
首肩背中が凝りやすく
眼鏡のお世話になるばかり

周辺視野とは 見渡す視力
ぼーっと遠くを見渡す中で
物事・全体 認識し
身体の動きと関係す
周辺視野が広ければ
身体動きは俊敏で

軸が取れるで安定す
周辺視野が狭ければ
動きは鈍くて 硬くなり
関節無理して 故障して
杖をつく人増えていく

一点凝視で目を動かさず
中心ばかりの目の機能
周辺視野を使わねば
身体しんたい全体硬くなる
近くばかりを見ていては
気持ちも体も狭くなり
遠くを見る時 増やすなら
心も体も 広がるぞ
目の動きを よく使い
左右に目を振り 八の字に
目を動かせば 視野広がり
身体からだは動きを取り戻す
健康維持は 目が導く



新涼書しんりょうしょを讀よむ 殿山木風

西山せいざんの落日らくじつ 紅塵こうじんを納おさめ

絡緯らくい数聲すうせい 涼意りようい新あらたなり

傲ごうを寄よす南窓なんそう 天半てんぱんの月つき

書しょを閉とじ暫ざん且しよ 復人またひとを思おもう

新涼讀書（八月兼日題）令和五年六月十四日

西山落日納紅塵 絡緯数聲涼意新

寄傲南窓天半月 閉書暫且復思人

(語釈) ○西山…ここでは富士山の意。○紅塵…俗世間のわずらわしい事柄。○絡緯…こおろぎ。

○寄傲…気ままな、のんびりした心境になる。(陶潜の詩に 南窓に倚り、以て傲を寄す。とあり) ○暫且…しばし。
(通釈) 夕日は富士山の方に傾き、俗世間の煩わしさもおさまって行く。

すると庭から虫の声が聞こえてきて、途端に涼しさを覚えた。

気促に過ごす私の書齋にはお月さんの光りも入ってきたが、読んでいた本を閉じてしばらくは又人を思うのである。
※岳精会の漢詩勉強会にお付き合ひして詩を作った。この度の兼題は特別の場面を画かなくても普段の生活の中にあると思ひ詩作に入った。何時までも一人勝手な漢詩である。でも虚構は嫌いだ。この度はまた、西の方、富士山を越えて九州の大恩人である吾が師を思う事で結んだ。この稿を纏めている時はミンミンゼミやアラゼミが盛んに鳴いている八月一日であるが、やがて旧盆を迎える頃には秋の虫が鳴き始める。次第に時が移って蟬はツクツクホウシにかわる。同時に夜の虫の鳴き声も盛んになる。三十五年も住み着くと一年の季節の移り変わりが解ってくる。でもその年の特徴ある様子も体験した。熱海の研修から暮れなずむ夕刻に蟬の声で迎えられながら帰宅したが、家に入ると蟬がびたりと鳴き止んで間を置いて虫の声が聞こえ始めた時は妙な感興が起ったものだ。

涼新た影富士ながむ窓辺かな

編集室だより【二〇二三年七月】

今泉 由利

○大好きなものを、身近に置いて「出逢えてよかった」「一緒にいられてありがとう」と話しかけつつ、大好きなもの、ルーツ、歴史を調べたりしながら、共存している。

○国境をこえて、移動が激しい生活だったから、出逢いが多かったのに、どこかで、なくなってしまった！ものも多く、つみ深い。今は、一緒に楽しくテレパシーで暮らしてられるけれど、この先どうしたら良いのだろう…と惑ってしまう。縮小しなければいけないのではないか、増やしてはいけないのではないか…今、一緒にいられることを喜べば、それで良い。前後左右を気にせず、今、自身が喜ぶことを自分にしてゆく基本方針にしよう。父も母も居なくなってしまったから、日本の父と母に逢いに行くという本来の私の基本がな

くなってしまう、いまだに途方にくれている。子供達は、今、私が何を言わなくても、安心していれば良いようになっている。こんなに良い時にいることだけを喜べば良い。

○自身が一番大切な物は、直径30センチのタネ。直径30センチ、重さ2キロ？。インド洋セイシエル諸島のみ原産のヤシ科植物大実椰子、ココ・デ・メールという双子椰子の実。世界最大の種子。雌雄異株、樹高30cm程。生長がおそく種子が発芽するのに2〜3年を要し、毎年1枚づつ葉を出し、開花までには25〜30年の経過といわれる。

もう、四十年くらい私と一緒にいて、引越の度には、自身でできかかえる。

○アルゼンチンの赤道近い地方、収穫のおどりに用いられた、パロバルサと、軽い木で彫られた、収穫のおまつりに、その地方の動物のお面を壁いっぱい。床にはアルゼンチン・アマゾン近い動物達が、床にも机の

下も毎日、毎日、思い出のあることを思い出させてくれる動物達。本来の環境と遠くつれてきてしまつてごめんなさいと、私の知る限りでアマゾンの動物達と遊んでいる。

このこたちを思うと必死でつきあつてしまふ。

○父が奈良の修学旅行への付添医で一刀彫のヒナ段を求めた。ずっと父の書斎の中心を示していたけれど、私がアルゼンチンへ行く時父が手渡して下さった。

インカのお墓からでてきた小さい動物が織り込まれた布。これは山登りの人が、ペルー遠征の時、持つてきて下さった。

○セリーナさんが下さったつぼは、国外持出禁止の品で、まだアルゼンチンにある。私の宝物にかこまれて私にとつて、こんなに大切なものにかこまれているのだから、むやみに死ねない。カイロプラクティック行き、針灸先生に、体操の先生に全身きたえていただいて自分の宝をいつまでも自分で守っていききたい。

「絹の話」講座

絹の来た道、これからの道

三河アララギ掲載150回記念

皆様と絹を語る

1回 紫式部と十二単（能装束、歌舞伎衣装）

開催者 三河アララギ 今泉由利

講師 今泉雅勝（日本野蚕学会副会長）

日時 2023年10月11日（水） 15:00～17:00 無料

懇親会 会場：京料理「京の菜」 18:00～

場所 アトリエトレビ

東京都千代田区神田小川町2-18 扇ビル3階

TEL 03-16904-2560

HP <https://www.akasaka-trevis.jp>

交通 地下鉄千代田線、都営新宿線 E5出口徒歩2分

※この講座に参加ご希望の方は事前にご連絡いただきたく
思います。

連絡先 アトリエトレビ 又は

今泉由利 090-8434-8646

URL <http://mazumiyuri.jp/>

予定

2回 ローマの貴族とシルクロード

3回 日本の絹のあけほの「海彦、山彦」

4回 絹と健康「幸せホルモンの分泌」

5回 これからの絹「皮膚、骨を作る」「蜘蛛の糸」

第6回 現代歌人の集い

主催/日本現代詩歌文学館 共催/一般社団法人 現代歌人協会 後援/岩手県歌人クラブ

第6回現代歌人の集い

開催日 令和5年11月18日(土)
時間 13時30分～16時30分
会場 日本現代詩歌文学館 講堂
参加料 無料

◆入選発表・表彰

◆選者座談会

大松達知(コスモス)、工藤玲音(コスモス)
高木佳子(潮音)、千葉聡(かばん)
富田睦子(まひる野)

◆記念講演 坂井修一(かりん)

「馬場あき子のみちのく」

作品募集

◆方法

- ・自作未発表作品3首1組(何組でも応募可)。
- ・専用の応募用紙(コピー可)に作品と必要事項を記入し、定額小為替・現金書留等で応募料(1組につき1,000円)を同封の上、郵送またはご持参ください。
- ・応募用紙は当館ホームページよりダウンロードいただけます。左記までご請求ください。

◆締切

9月15日(金) 必着

◆応募先・お問合せ先

024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60
日本現代詩歌文学館 第6回現代歌人の集い係



日本現代詩歌文学館

〒024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60 TEL 0197 (65) 1728 FAX 0197 (64) 3621

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三
フォーレストビルズ三〇二
ケイタイ 090・8434・8646
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利